

## 先端研究助成基金助成金(最先端・次世代研究開発支援プログラム) 実績報告書

本様式の内容は一般に公表されます

研究課題名	ネットいじめ研究の新展開-「行動する傍観者」を生み出すプログラム-
研究機関・ 部局・職名	筑波大学・図書館情報メディア系・准教授
氏名	鈴木 佳苗

1. 研究実施期間 平成23年2月10日～平成26年3月31日

2. 収支の状況

(単位:円)

	交付決定額	交付を受けた額	利息等収入額	収入額合計	執行額	未執行額	既返還額
直接経費	77,000,000	77,000,000	0	77,000,000	77,000,000	0	0
間接経費	23,100,000	23,100,000	0	23,100,000	23,100,000	0	0
合計	100,100,000	100,100,000	0	100,100,000	100,100,000	0	0

3. 執行額内訳

(単位:円)

費目	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	合計
物品費	85,079	2,859,358	1,246,591	6,890,269	11,081,297
旅費	0	3,034,839	2,819,775	2,312,659	8,167,273
謝金・人件費等	52,593	10,443,615	10,839,407	10,560,429	31,896,044
その他	98,376	4,093,282	4,231,765	17,431,963	25,855,386
直接経費計	236,048	20,431,094	19,137,538	37,195,320	77,000,000
間接経費計	70,814	6,129,328	5,741,261	11,158,597	23,100,000
合計	306,862	26,560,422	24,878,799	48,353,917	100,100,000

4. 主な購入物品(1品又は1組若しくは1式の価格が50万円以上のもの)

物品名	仕様・型・性能等	数量	単価 (単位:円)	金額 (単位:円)	納入 年月日	設置研究機関名
				0		
				0		
				0		

5. 研究成果の概要

いじめ・ネットいじめ予防のために、対人トラブルを目撃した主人公の立場で行動を選択し(傍観や仲裁など)、選択した行動の結末を体験したうえで自分にできる行動について考えること等を目指したインタラクティブ・ソフトウェア(IS)を開発した。この教材を用いた教育プログラムを提案し、高校生を中心に実践を行った結果、事態が悪化する前の行動の重要性やさまざま行動の選択肢を理解し、ネット上を含む日頃のコミュニケーションの留意点等への考察も見られた。また、ISの素材を用いて、インターネット安全利用の内容を含む、コミュニケーションの問題を学びスキルを養成するための教育プログラム等も提案し、実践・評価を行った。本研究の成果は筑波大学のウェブ上に公開しており、教育現場での活用・展開が期待される。

課題番号	LZ002
------	-------

## 先端研究助成基金助成金(最先端・次世代研究開発支援プログラム) 研究成果報告書

本様式の内容は一般に公表されます
------------------

研究課題名 (下段英語表記)	ネットいじめ研究の新展開-「行動する傍観者」を生み出すプログラム-
	Breakthrough in studies on cyberbullying: A program to produce active bystanders
研究機関・部局・ 職名 (下段英語表記)	筑波大学・図書館情報メディア系・准教授
	Associate Professor, Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba
氏名 (下段英語表記)	鈴木 佳苗
	Kanae Suzuki

### 研究成果の概要

(和文): いじめ・ネットいじめの予防に向けて、本研究では実態等の調査を行い、また、対人トラブルを目撃した主人公の立場で行動(傍観や仲裁等)を選択し、選択の結果を疑似体験したうえで自分にできる行動について考えること等を目指したインタラクティブ・ソフトウェア(IS)を開発した。高校生を中心にこのISやISの素材等を教材として教育実践を行った結果、自分ができる具体的な働きかけの方法や早期の行動の重要性を理解し、ネット上を含むコミュニケーションの留意点等への考察も見られた。本研究は、大学のウェブページを通じて調査結果、ISやISの素材等を含む教育プログラム等の発信・共有を行うことにより、今後のいじめ・ネットいじめ予防の実践や研究の進展に寄与できると考えられる。

(英文): To assist and advance the goal of preventing bullying and cyber-bullying, this study investigated the present situation and developed an interactive software (IS). The IS is designed to enable players to experience the consequences of their actions (e.g., bystanding or intervening) as a witness to interpersonal troubles between classmates. Players choose their simulated actions and witness if the situation worsens or settles as a consequence of their actions. Educational activities using the IS and its related materials

as the tools for these activities enabled participants to understand concrete approaches to those around them, including bullies and victims, and the importance of taking early action. It also facilitated them to identify points of concern in both face-to-face and Internet-based communication. Through the development and dissemination of survey findings and these educational programs, including the IS itself and its related materials, on the university website, this study can contribute to future research and practice in bullying and cyber-bullying prevention.

1. 執行金額 100,100,000 円  
(うち、直接経費 77,000,000 円、間接経費 23,100,000 円)
  
2. 研究実施期間 平成 23 年 2 月 10 日～平成 26 年 3 月 31 日

### 3. 研究目的

インターネットは今や子どもたちの日常生活に欠かせないコミュニケーションツールになっている。これまでに、インターネットの利用が高校生の対人関係の親密性を高める場合がある一方で、ネット上のいじめ（以下、「ネットいじめ」と記す）のような問題も発生している。

ネットいじめは、従来の学校でのいじめの一形態（手段としてインターネットを使用したいじめ）である。ネットいじめの被害としては、時間や場所を問わず絶え間なく誹謗・中傷が行われたり、一旦ネット上に個人情報や画像が流出すると加工の容易さから誹謗・中傷に悪用されたりしやすく、また、長期間、不特定多数の人からアクセスされる可能性があること等がある。ネットいじめを含むいじめ対策には早期発見と早期介入の観点が必要であるが、特にインターネットは事態を早く広く悪化させる傾向がある。

いじめの原因にはさまざまなものがあると考えられているが、いじめに対する傍観行動が事態の悪化を招く場合があることから、「沈黙する傍観者」から「行動する傍観者」へ等、いじめを目撃した（加害行動をとった人、加害行動の被害を受けた人以外の）周囲の人々の行動に注目する取り組みへの期待がある。いじめを目撃した周囲の人々の個人特性や状況によってとることができる行動は異なるため、目撃した場合にどのタイミングでどのような行動を選ぶかを判断し、選択した行動の結果を踏まえて、今後さまざまな行動の選択肢のなかから個人や状況に応じて自分にできる行動を考えていくことが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、加害行動をした人、加害行動を受けた人以外の周囲の人々の行動と、自らの行動選択とその結果を疑似体験できるゲーミング・シミュレーションの手法に注目し、以下の3つの目的を検討することとした。

- (1) ネットいじめ・いじめ<sup>1</sup>の生起状況や対策の情報収集と整理を行う（目的1）
- (2) ネットいじめ・いじめを目撃した場合の行動（傍観行動や仲裁行動等）<sup>2</sup>によって状況が変化する対人相互作用過程を再現するISを開発する（目的2）
- (3) (2)で開発したISを組み込んだ新しい教育プログラム（教育内容、実施計画・実施方法・教材・設備などの教育システムを含む）の提案とその配布・実践サポートを行う（目的3）

### 4. 研究計画・方法

- (1) 目的1「ネットいじめ・いじめの生起状況や対策の情報収集と整理を行う」ための研究計画・方法

---

<sup>1</sup> 前述のように、ネットいじめは従来の学校でのいじめの一形態であることから、ネットいじめの生起状況に関する検討だけでなく、実際にいじめについても検討しており、目的においても「ネットいじめ・いじめ」と記述した。

<sup>2</sup> 当初の目的では、「ネットいじめの当事者以外の者（「行動する傍観者」）の行動」と記述していたが、目撃した人の行動の選択肢には積極的な行動（仲裁行動等の「行動する傍観者」の行動）も傍観行動もあり、ISではそれぞれの行動の結果を再現していることから、上述のように記述した。

## 様式21

- ① 青少年のネットいじめ・いじめの実態を明らかにするために、ネット上で加害・被害経験あるいは加害行動の目撃経験のある高校生、高校生のときにいじめの被害経験のある者などに対する複数の調査を実施した
- ② ネットいじめ・いじめ問題への対策の実態や、対策にかかわる教員や保護者の意識を明らかにするために、クラス担任、保護者等に対する複数の調査を実施した
- ③ ネットいじめといじめの予防のための指導のポイントや指導方法等を検討するために、専門家や現役の高校教員を対象とした聞き取り調査を実施した

### (2) 目的2「ネットいじめ・いじめを目撃した場合の行動（傍観行動や仲裁行動等）によって状況が変化する対人相互作用過程を再現する IS を開発する」ための研究計画・方法

- ① IS のシナリオを制作した
- ② ①のシナリオ制作に基づいて絵コンテを制作した
- ③ この絵コンテに基づいて IS を制作した
- ④ ③の IS の評価に基づいて IS を修正した

### (3) 目的3「目的2で開発した IS を組み込んだ新しい教育プログラムの提案とその配布・実践サポートを行う」ための計画・方法

- ① IS を組み込んだ教育実践の内容を検討し、実践を行った
- ② IS の素材を用いた教材を組み込んだ教育実践の内容を検討し、実践を行った
- ③ IS 自体、IS および IS の素材を用いた教材を組み込んだ教育実践の指導案や実践レポート等を発信・共有するために、ウェブサイトを立ち上げ、運用を開始した

## 5. 研究成果・波及効果

### (1) 目的1「ネットいじめ・いじめの生起状況や対策の情報収集と整理を行う」の成果

目的1については、本研究開始時よりいじめ・ネットいじめの生起や予防・対策に関する文献調査、実態調査、訪問調査を進めた。主な調査結果は、以下の通りである。

- ① 文献調査等により、国内外の「いじめ」の概念のさまざまな定義を参照した結果、「いじめ」かどうかの判断が難しい場合が多く見られた。従来の「いじめ」の概念は対人関係がかなり悪化した状態になっており介入がより困難であること、「いじめ」かどうかの判断の遅れが対処の遅れにつながり事態をより深刻化させること、いじめの一形態であるネットいじめは事態の悪化を加速させ、波及範囲を拡大し、別のトラブル（情報漏えい）を新たに引き起こすことなどから、いじめ・ネットいじめの予防のためには、いじめに至るまでの対人トラブルの段階で、より早く、適切な行動を取ることが重要であることが示唆された
- ② 被害経験者へのインタビュー調査から、対人トラブルが悪化していじめに至る過程（加害行動をとる人が限度を知らずにやりすぎる過程があり、被害経験者に相談相手がおら

## 様式21

- ず、また、ネット上での周囲の介入が事態を悪化させる等)への示唆が得られた
- ③ 加害経験者への調査から、加害経験者は同じ学校の人へのメールでの悪口の送信や仲間外しを多く経験していることが示された
  - ④ 目撃経験者への調査から、悪口の書き込みや陰口メールへの遭遇経験が多く、また、目撃経験者と被害経験者の関係が遠いときに介入行動がみられにくく傍観行動がみられやすいこと等が示された
  - ⑤ 文献調査等により、対人トラブルの悪化を防ぐ具体的な方法・行動として、加害行動をとった人に働きかけをする場合の説得の方法(理由を伝える、Win-Win、Iメッセージ、話し方等)、仲裁の方法(葛藤解決、問題解決のスキル等)、また、被害を受けた人に寄り添いサポートする(仲間に誘う、援助する等)等が示唆された

### (2) 目的2「ネットいじめ・いじめを目撃した場合の行動(傍観行動や仲裁行動等)によって状況が変化する対人相互作用過程を再現するISを開発する」の成果

#### ① ISの開発

本研究では、対人トラブルを目撃した場合にどのタイミングでどのような行動を選ぶかを判断し、選択した行動の結果を踏まえて今後、さまざまな行動の選択肢のなかから個人や状況に応じて自分にできる行動を考えていくために用いる教材としてISを開発した。

ISのストーリーは、次のようなものである。主人公の女子高生が同級生(後に加害行動をする人)から彼女の仲良しグループのメンバー(後に加害行動を受ける人)に対する不満を聞くところから始まる。主人公が早期に適切に行動すると事態の悪化を防ぐことができるが、行動のタイミングが遅れたり不適切な行動をとったりした場合には事態が悪化し、悪化の程度により3種類の結末がある。

ISでは、プレイヤーが主人公の女子高生の立場で会話を読みながら、対人トラブルに対する行動(仲裁、傍観など)を選択してストーリーを進めていく。対人トラブルについては、SNSへの書き込みからのトラブルの悪化だけでなく、SNS上の個人情報の公開や情報漏えい等のトラブルも含めているため、インターネット利用の危険性や問題を理解し、コミュニケーションの問題についても考えることができる内容になっている。

プレイヤーの行動の選択肢は、「しばらく様子を見る」といった傍観行動以外に、「加害行動をしている人にやめるように言う」「先生に相談する」「親に相談する」といった事態改善のための行動や、「被害を受けた人をサポートする」行動のように、いじめを目撃したときにどのような行動を取るかという先行研究や本研究の調査の結果で見られた行動が含まれている。また、プレイヤーが「加害行動をしている人にやめるように言う」際に相手を非難するようなコミュニケーションを選択した場合には、コミュニケーションの留意点が解説で出てきたり、エンディングの後に対人トラブルを目撃した場合の行動選択やネットの安全利用に関する解説を組み込み、授業でも、自主学習でも使用できる構成とした。

#### ② ISの評価と修正

シナリオ・絵コンテの制作を含む、ISの開発過程では、高校生・大学生・大学院生・高

校教員を対象として段階的に評価・修正を行った。IS の評価については、高校生を対象として計 4 回の体験と評価を段階的に行った。また、大学生・大学院生・現役の高校教員を対象とした評価も行った。IS の評価の結果、IS の内容や操作で分かりにくかったという回答が得られた箇所については、大きく 2 回に分けて修正を行った。高校生による最終的な IS の評価では、内容や操作の分かりにくさが改善されていた。

### (3) 目的3「目的2で開発したISを組み込んだ新しい教育プログラムの提案とその配布・実践サポートを行う」の成果

ISを組み込んだ教育実践については、高校生約 100 名を対象として授業中や放課後等にISを組み込んだ教育プログラムを実施した。具体的な実践例として、高等学校の「情報」の授業で、スライド資料やワークシートを用いて、生徒が 1 人 1 台のPCを用いてISを体験した後、対人トラブルを目撃した際に自分たちに何ができるのかを考えさせたり、グループで考えを話し合ったりする構成で実施した。事後アンケートの結果、多くの生徒が対人トラブルを目撃した場合に、自分ができていることを考えて素早く行動に移すことの重要性に気づいていた。また、IS中で自分が選択した行動の結果を踏まえて自分が他に取ることでできた行動の選択肢（対人トラブルの当事者を否定せずに双方の話を聞く、加害行動をとった人に直接話をする、加害行動をとった人に同意しない、被害を受けた人を一人にしない等）について考えていた。さらに、日頃の対人関係やネット上のコミュニケーションで気をつけようと思う行動についても具体的にあげられていた。これらの結果から、ISを組み込んだ教育プログラム自体の学習目標は達成できたと言える。ただし、この効果は授業後の短期的な結果であり、中・長期的な結果については今後の実践を通して引き続き検討していく必要がある<sup>3</sup>。

これらの実践結果を踏まえて、最終的に、ISを組み込んだ新しい教育プログラムを提案した。この教育プログラムは、IS以外に、授業指導案、IS以外に授業で使用する資料（スライド資料、ワークシート等）等から構成されている。この教育プログラムを学校ですぐに実施できるように、教材パッケージを作成した<sup>4</sup>。

また、本研究のウェブページでは、ISの開発時に収集したコンテンツ教材の内容をまとめ（日本語・英語）、これまでの調査結果や成果発表などについても公開している<sup>5</sup>。

さらに、専門家や現役の高校教員からの助言を得て、ISを用いた教育プログラム以外にインターネットの安全利用等に関する学習を目的とした、ISの素材（ストーリー・画像等）を用いた授業を高校で行い、モデル指導案等にまとめてウェブ上で公開している。

<sup>3</sup>本研究では、上述のように調査結果に基づいてISを開発、実践・評価し、短期的にはあるが、ISを用いた教育プログラムで設定していた学習目標に関する生徒の理解・気づきが見られた。本研究の期間は3年2か月であり、ISの効果を長期的に検討することが困難であったが、今後、さらに実践を行い、教育プログラムを改訂したり、新たな教育プログラムを提案していく予定がある。

<sup>4</sup>現在はウェブ上からダウンロードできるようになっている。

<sup>5</sup>研究期間終了後も引き続き更新している。

6. 研究発表等

<p>雑誌論文 計 3 件</p>	<p>(掲載済み一査読有り) 計 1 件 Suzuki, K., Kashibuchi, M., Yamaki, R., Kumazaki, A., Horiuchi, Y., &amp; Inomata, F. (2012). Use of gaming simulation for cyber-bullying prevention. <i>Studies in Simulation and Gaming</i>, <b>22</b>(Special), 39-48.</p> <p>(掲載済み一査読無し) 計 2 件 Kumazaki, A., Suzuki, K., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2011). The Effects of Netiquette and ICT Skills on School-bullying and Cyber-bullying: The Two-wave Panel Study of Japanese Elementary, Secondary, and High School Students. <i>Procedia-Social and Behavioral Sciences</i>, <b>29</b>, 735-741.</p> <p>(教育専門雑誌) 鈴木佳苗 (2013). 携帯電話・ネット使用がいじめに影響する? 道徳教育, 655, 12-15.</p> <p>(未掲載) 計 0 件</p>
<p>会議発表 計 36 件</p>	<p>(査読あり)</p> <p>(1) Suzuki, K., Yamaoka, A., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2014). Effects of experience of stressful life events and stress on aggressive behavior toward student peers on the Internet and in school in Japan. Virtual Paper presented at Society for Information Technology and Teacher Education 2014. (Jacksonville, Florida, United States) (会議開催期間:2014年3月17-21日、会議主催機関名:Association for the Advancement of Computing in Education)</p> <p>(2) Suzuki, K., Kumazaki, A., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2012). Analyzing effects of mobile and PC Internet usage on cyberbullying experiences by age and gender: A three-wave panel study of Japanese elementary, secondary and high school students. Paper presented at the 8th International Conference on Cyberbullying, Paris, France (Abstract) (会議開催期間:2012年6月28-29日、会議主催機関名:COST)</p> <p>(3) Kumazaki, A., Suzuki, K., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2012). Moderating effects of netiquette on negative effects of ICT skills and cyber bullying: One-year, two-wave panel study of Japanese elementary, secondary and high school students. Paper presented at the 8th International Conference on Cyberbullying, Paris, France (Abstract) (会議開催期間:2012年6月28-29日、会議主催機関名:COST)</p> <p>(4) Horiuchi, Y., Kashibuchi, M., Kumazaki, A., Yamaki, R., &amp; Suzuki, K. (2012). Cyber peer aggression among high school students in Japan: A study of responses to cyber peer aggression via mobile phone survey. Poster presented at International Conference of Bullying and Cyberbullying: The Interface between Science and Practice, Vienna, Austria. (Abstract) (会議開催期間:2012年10月19日、会議主催機関名:COST)</p> <p>(5) Kashibuchi, M., Horiuchi, Y., Kumazaki, A., Yamaki, R., &amp; Suzuki, K. (2012). Cyber peer</p>

	<p>aggression among high school students in Japan: A study of encounter rates via mobile phone survey. Poster presented at International Conference of Bullying and Cyberbullying: The Interface between Science and Practice, Vienna, Austria. (Abstract) (会議開催期間：2012年10月19日、会議主催機関名：COST)</p> <p>(6) Suzuki, K., Kumazaki, A., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2012). Gender differences in bullying experiences among Japanese students. Paper presented at the 10th Annual Hawaii International Conference on Education, Honolulu, Hawaii, USA. (会議開催期間：2012年1月5-8日、会議主催機関名：Hawaii International Conference on Education)</p> <p>(7) Suzuki, K., Kumazaki, A., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2011) Effects of mobile Internet usage on cyber- and school-bullying experiences: A two-wave panel study of Japanese elementary, secondary, and high school students. 2011. Paper presented at the 3rd Global Conference Bullying and the Abuse of Power, Prague, Czech Republic (Full Paper). (会議開催期間：2011年11月8-10日、会議主催機関名：Inter-Disciplinary.Net)</p> <p>(8) Kumazaki, A., Suzuki, K., Katsura, R., Sakamoto, A., &amp; Kashibuchi, M. (2011). Netiquettes moderating the effect of Internet use on cyber-bullying: The two-wave panel study of Japanese elementary, secondary, and high school students. Paper presented at the 3rd Global Conference Bullying and the Abuse of Power (Prague, Czech Republic (Full Paper). (会議開催期間：2011年11月8-10日、会議主催機関名：Inter-Disciplinary.Net)</p> <p>(査読なし)</p> <p>(1) Suzuki, K. (2013). Current state of cyberbullying and bullying and counter-measures in Japan: Development of educational materials and future research issues. International session presented at the 3rd annual Bullying Research Network Think Tank (Santa Barbara, California, United States) (会議開催期間：2013年6月18-20日、会議主催機関名：Bullying Research Network Think Tank)</p> <p>(2) 堀内由樹子・樫淵めぐみ・山岡あゆち・猪股富美子・八巻龍・鈴木佳苗 (2013). 生徒指導における連携に関する教員の意識(1)－学校内外での情報共有に対する意識－日本教育心理学会第55回総会（法政大学） (会議開催期間：2013年8月17-19日、会議主催機関名：日本教育心理学会)</p> <p>(3) 山岡あゆち・樫淵めぐみ・堀内由樹子・猪股富美子・八巻龍・鈴木佳苗 (2013). 生徒指導における連携に関する教員の意識(2)－生徒間のトラブルにおける被害届の提出に対する意識－日本教育心理学会第55回総会（法政大学） (会議開催期間：2013年8月17-19日、会議主催機関名：日本教育心理学会)</p> <p>(4) 山岡あゆち・樫淵めぐみ・堀内由樹子・猪股富美子・八巻龍・鈴木佳苗 (2013). 教員・保護者・一般成人を対象とする法意識に関する調査(1)－法に対する意識－日本社会心理学会第54回大会（沖縄国際大学）</p>
--	--

	<p>(会議開催期間：2013年11月2-3日、会議主催機関名：日本社会心理学会)</p> <p>(5) 樫淵めぐみ・堀内由樹子・山岡あゆち・猪股富美子・八巻龍・鈴木佳苗 (2013). 教員・保護者・一般成人を対象とする法意識に関する調査(2) -罰に対する意識- 日本社会心理学会第54回大会 (沖縄国際大学)</p> <p>(会議開催期間：2013年11月2-3日、会議主催機関名：日本社会心理学会)</p> <p>(6) 堀内由樹子・山岡あゆち・樫淵めぐみ・猪股富美子・八巻龍・鈴木佳苗 (2013). 教員・保護者・一般成人を対象とする法意識に関する調査(3) -共同体・権利に対する意識- 日本社会心理学会第54回大会 (沖縄国際大学)</p> <p>(会議開催期間：2013年11月2-3日、会議主催機関名：日本社会心理学会)</p> <p>(7) 鈴木佳苗・熊崎あゆち・桂瑠以・坂元章・樫淵めぐみ (2012). ネットいじめの加害経験者におけるネット利用の影響(3) -高校生を対象としたモバイル調査におけるネットいじめ加害行動経験率の単純集計- 日本心理学会第76回大会 (専修大学)</p> <p>(会議開催期間：2012年9月11-13日、会議主催機関名：日本心理学会)</p> <p>(8) 堀内由樹子・鈴木佳苗・熊崎あゆち・樫淵めぐみ・桂瑠以・坂元章 (2012). ネットいじめの加害経験者におけるネット利用の影響(4) -ネットいじめの加害理由の単純集計- 日本心理学会第76回大会 (専修大学)</p> <p>(会議開催期間：2012年9月11-13日、会議主催機関名：日本心理学会)</p> <p>(9) 熊崎あゆち・樫淵めぐみ・堀内由樹子・鈴木佳苗・桂瑠以・坂元章 (2012). ネットいじめの加害経験者におけるネット利用の影響(5) -ネットいじめの加害行動経験がある高校生及び一般高校生の ICT スキル及び情報モラルの実態- 日本心理学会第76回大会 (専修大学)</p> <p>(会議開催期間：2012年9月11-13日、会議主催機関名：日本心理学会)</p> <p>(10) 熊崎あゆち・鈴木佳苗・桂瑠以・坂元章・樫淵めぐみ (2012). 子どものインターネット利用といじめ(9) -ネットを利用した/利用しない仲間内攻撃行動の被害経験の重なり- 日本社会心理学会第53回大会(つくば国際会議場)</p> <p>(会議開催期間：2012年11月17-18日、会議主催機関名：日本社会心理学会)</p> <p>(11) 鈴木佳苗・熊崎あゆち・桂瑠以・坂元章・樫淵めぐみ (2012). 子どものインターネット利用といじめ(10) -ネットを介した仲間内攻撃行動がネットを介さない仲間内攻撃行動に及ぼす影響に対する携帯電話とパソコン利用の調整効果- 日本社会心理学会第53回大会 (つくば国際会議場)</p> <p>(会議開催期間：2012年11月17-18日、会議主催機関名：日本社会心理学会)</p> <p>(12) 熊崎あゆち・樫淵めぐみ・堀内由樹子・鈴木佳苗・八巻龍 (2012). ネットスケッチの作成 -高校生ウェブ調査による検討- 日本教育工学会第28回全国大会 (長崎大学)</p> <p>(会議開催期間：2012年9月15-17日、会議主催機関名：日本教育工学会)</p> <p>(13) 八巻龍・樫淵めぐみ・堀内由樹子・熊崎あゆち・鈴木佳苗 (2012). ネット上における情報発信知識尺度の作成 -高校生モバイル調査による検討- 日本教育工学会第28回全</p>
--	--

	<p>国大会（長崎大学）          （会議開催期間：2012年9月15-17日、会議主催機関名：日本教育工学会）</p> <p>(14) 鈴木佳苗・熊崎あゆち・桂瑠以・坂元章・榎淵めぐみ (2012). ネット上の仲間内攻撃行動に対する学校での仲間内攻撃行動の影響 日本教育工学会第 28 回全国大会（長崎大学）          （会議開催期間：2012年9月15-17日、会議主催機関名：日本教育工学会）</p> <p>(15) 堀内由樹子・熊崎 あゆち・榎淵 めぐみ・鈴木 佳苗・安藤 玲子・坂元 章・桂 瑠以 (2012). 家庭における中高生の IT メディア利用ルールの実態 日本教育工学会第 28 回全国大会（長崎大学）          （会議開催期間：2012年9月15-17日、会議主催機関名：日本教育工学会）</p> <p>(16) 堀内由樹子・榎淵めぐみ・熊崎あゆち・鈴木佳苗・八巻龍 (2012). 高校生がネット上における仲間内攻撃行動を目撃した際の行動(1) -被害者との関係性別の集計結果- 日本教育心理学会第 54 回総会（琉球大学）          （会議開催期間：2012年11月23-25日、会議主催機関名：日本教育心理学会）</p> <p>(17) 熊崎あゆち・榎淵めぐみ・堀内由樹子・鈴木佳苗・八巻龍 (2012). 高校生がネット上における仲間内攻撃行動を目撃した際の行動(2) -加害者との関係性別の集計結果- 日本教育心理学会第 54 回総会（琉球大学）          （会議開催期間：2012年11月23-25日、会議主催機関名：日本教育心理学会）</p> <p>(18) 榎淵めぐみ・鈴木佳苗・熊崎あゆち・堀内由樹子・八巻龍・猪股富美子 (2012). 高校生活におけるネットを介した対人トラブルの実態と対策 -被害経験者に対するインタビューをもとに- 日本教育心理学会第 54 回総会（琉球大学）          （会議開催期間：2012年11月23-25日、会議主催機関名：日本教育心理学会）</p> <p>(19) 堀内由樹子・榎淵めぐみ・熊崎あゆち・鈴木佳苗・八巻龍 (2012). 高校生がネットを介した仲間内攻撃行動を傍観する理由の検討 日本社会心理学会第 53 回大会（つくば国際会議場）          （会議開催期間：2012年11月17-18日、会議主催機関名：日本社会心理学会）</p> <p>(20) 鈴木佳苗・熊崎(山岡)あゆち・桂(赤坂)瑠以・坂元章・榎淵めぐみ(2012). 子どものインターネット利用といじめ(7)-家庭でのパソコンの新規取得が高校生のネット上の加害経験に及ぼす影響-日本発達心理学会第 23 回大会（名古屋国際会議場）          （会議開催期間：2012年3月19-11日、会議主催機関名：日本発達心理学会）</p> <p>(21) 榎淵めぐみ・鈴木佳苗・熊崎(山岡)あゆち・堀内由樹子・坂元章・桂(赤坂)瑠以(2012). ネットいじめの加害経験者におけるネット利用の影響(1)-ネットいじめ加害行動の経験率と停止要因の単純集計-日本発達心理学会第 23 回大会（名古屋国際会議場）          （会議開催期間：2012年3月19-11日、会議主催機関名：日本発達心理学会）</p> <p>(22) 堀内由樹子・鈴木佳苗・熊崎あゆち・榎淵めぐみ・坂元章・桂(赤坂)瑠以(2012). ネットいじめの加害経験者におけるネット利用の影響(2)-ICT スキル、情報モラルとネット</p>
--	--

	<p>知識の単純集計ー日本発達心理学会第23回大会（名古屋国際会議場）          （会議開催期間：2012年3月19-11日、会議主催機関名：日本発達心理学会）</p> <p>(23) 熊崎(山岡)あゆち・鈴木佳苗・桂(赤坂)瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2012). 子どものインターネット利用といじめ(8)ーICT スキルと情報モラルがネット及び学校でのいじめ加害経験に与える1年後の影響についてー 日本発達心理学会第23回大会（名古屋国際会議場）          （会議開催期間：2012年3月19-11日、会議主催機関名：日本発達心理学会）</p> <p>(24) 鈴木佳苗・熊崎(山岡)あゆち・桂(赤坂)瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2011). 日本におけるネットいじめの現状と対策(1)ー小学生・中学生・高校生を対象とした加害行動の実態調査ー 日本教育工学会第27回全国大会（首都大学東京）          （会議開催期間：2011年9月17-19日、会議主催機関名：日本教育工学会）</p> <p>(25) 熊崎(山岡)あゆち・鈴木佳苗・桂(赤坂)瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2011). 子ども達のネット利用に関する担任教員による指導ー単純集計ー 日本教育心理学会第53回大会（北海道立道民活動センター）          （会議開催期間：2011年7月24-26日、会議主催機関名：日本教育心理学会）</p> <p>(26) 鈴木佳苗・熊崎(山岡)あゆち・桂(赤坂)瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2011). 子どものインターネット利用といじめ(3)ー2波パネル調査による携帯電話利用とネットおよび学校での加害経験の因果関係の検討ー 日本心理学会第75回大会（日本大学）          （会議開催期間：2011年9月15-17日、会議主催機関名：日本心理学会）</p> <p>(27) 熊崎(山岡)あゆち・鈴木佳苗・桂(赤坂)瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2011). 子どものインターネット利用といじめ(4)ーICT スキルと情報モラルがネット利用及び学校でのいじめの加害経験に与える影響ー 日本心理学会第75回大会（日本大学）          （会議開催期間：2011年9月15-17日、会議主催機関名：日本心理学会）</p> <p>(28) 熊崎あゆち・鈴木佳苗・桂瑠以・坂元章・樫淵めぐみ(2011). 子どものインターネット利用といじめ(6)ー携帯電話利用がネットいじめの加害経験に与える影響を調整する情報モラルの効果ー 日本社会心理学会第52回大会（名古屋大学）          （会議開催期間：2011年9月17-18日、会議主催機関名：日本社会心理学会）</p> <p>専門家向け 計36件          一般向け 計0件</p>
<p>図書          計0件</p>	

様式21

<p>産業財産権 出願・取得 状況</p> <p>計 0 件</p>	<p>(取得済み) 計 0 件</p> <p>(出願中) 計 0 件</p>
<p>Webページ (URL)</p>	<p>最先端次世代研究開発支援プログラム ネットいじめの新展開ー「行動する傍観者」を生み出すプログラム, 筑波大学図書館情報メディア系&lt;<a href="http://www.slis.tsukuba.ac.jp/ppab/">http://www.slis.tsukuba.ac.jp/ppab/</a>&gt;</p>
<p>国民との科学・技術対話の実施状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高大連携:筑波大学研究室訪問において、対人関係の問題解決を扱った国内外の教材(ゲームを含む)を紹介し、教材に期待される効果について概説した(標題:「知識情報学の最先端 2ーメディアの影響研究からメディア教育の実践を考える」 実施日 2011年 11月 15日、場所:筑波大学春日エリア、対象者:附属高校の生徒)。</li> <li>・「ネットいじめの予防に向けて」 青森県教育委員会情報モラル指導者講習会 (実施日:2012年 8月 7日、8日、場所:八戸(7日)、青森(8日)、対象者:青森県の公立小・中・高等学校及び特別支援学校の教員)</li> <li>・教員向けの研修会(筑波大学附属坂戸高等学校)でネット利用、ネットいじめの問題を中心に講義し、教材の紹介を行った。(標題:「最近の『いじめ』をどう考え、対応するか?」 実施日:2013年 10月 10日、場所:筑波大学附属坂戸高等学校、対象者:教員、参加者数:34名)</li> <li>・「第17回総合学科研究大会」(筑波大学附属坂戸高等学校主催)において、教育プログラム等の紹介を行った。(実施日:2014年 2月 20日、場所:筑波大学附属坂戸高等学校、対象者:研究大会の参加者[筑波大学附属坂戸高等学校の教員・生徒・保護者、総合学科を中心とする全国の高等学校、教育関連機関からの参加者])</li> <li>・「平成25年度春の研究発表大会 分科会② 『情報化の授業』」(大阪私学教育情報化研究会主催)において、教育プログラムや実践例の紹介を行った。(実施日:2014年 3月 21日、場所:大阪私学教育文化会館、対象者:大阪私学教育情報化研究会の会員、大阪府私立中学校・高等学校の教員)</li> <li>・FIRST シンポジウム 「科学技術が拓く 2030年へのシナリオ」(株式会社早稲田総研イニシアティブ)において、ポスター展示を行った。(実施日:2014年 2月 28日、場所:ベルサール新宿グランド、対象者:研究者・研究支援者・行政関係者・企業関係者・科学技術に関心のある者等)</li> </ul>
<p>新聞・一般雑誌等掲載 計 0 件</p>	
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本研究が世界と未来に向けた教育・研究及び様々な活動を紹介する TSUKUBA FUTURE において掲載された 「いじめの予防に向けて」 TSUKUBA FUTURE, 筑波大学 &lt;<a href="https://www.tsukuba.ac.jp/notes/013/index.html">https://www.tsukuba.ac.jp/notes/013/index.html</a>&gt;</li> <li>・研究協力者(私立羽衣学園高等学校教諭 米田謙三氏)が2013年度に以下の研究会等で本研究の教育プログラムの紹介を行った 全国高等学校情報科研究大会、大阪私学教育情報化研究会、文部科学省フォーラム、PTA 研修・教員研修会</li> </ul>

7. その他特記事項